

〈行動すること〉の純粹記述

—P. リクールの〈意志の哲学〉—

箱石 匡行*

(2003年10月25日受理)

リクールの『意志的なものと非意志的なもの』の第2部の表題は、「行動すること——意志的運動と諸能力」というものである。ここで彼が問題にしているのは、いったい、何なのであるか。ここで問われているのは、〈意志的なものと身体的なものとの関係〉なのである。

私は意志する。そして私は自分が意志したところのものをこの世界のうちにおいて実現しようとする。いま私が生きているこの世界の秩序は、私の意志したものが実現されることによって、変わってくるのである。この世界の変化は、私の身体の運動を通して行われる。意志するとは、たしかに、私の考え、私の意識における出来事であるが、しかし、私の意志したものは私の考え、私の意識のなかで実現されるのではない。それが実現されるのは、私の生きる世界のなかでのことである。したがって、ここで、私の身体が重要な意味をもってくることになるのである。

ここでは、『意志的なものと非意志的なもの』第2部「行動すること」第1章「行動することと運動することの純粹記述」の序論ともいうべき部分と「I 行動することの志向性と運動すること」の内容を、リクールの記述に即しつつ、考察していくことにする。

I 本来の意味における〈行動すること〉

1 〈意志すること〉と〈行動すること〉

私は意志する。これは次のことを意味する。すなわち、〈私は意志する〉とは、〈私は自分の身体を通して、自分が意志したところのものを実現しようとする〉ということなのである。それというも、「意志が決意の力であるのは、意志が運動の力であるからにほかならない」¹⁾。われわれはしばしば意志を運動の力から区別して考えるが、これはあくまでも抽象によってのことであって、実際には、両者を区別することは出来ないのである。

リクールが『意志的なものと非意志的なもの』第1部「決意すること」のなかで、決意する意識の歴史を語り、躊いから熟慮へ、そして選択といった意識の段階を区別しているが、これはあくまでも思想上の抽象なのである。同様に、「行動もひたすら決意に続いて起こるといってもいい」²⁾のである。

意志的なものと非意志的なものとの関係を考察するという場合、われわれは意志的行動とい

* 岩手大学教育学部

うものを広い意味において理解するべきであろう。例えば、私のなかで何かが思いつかれ、これに続いて自発的に生ずる運動とか、注意の意識とともに行われる自動的な運動といったものをも、リクールは「意志的な行動」³⁾と呼んでいるのである。そうした行動が〈意志的〉と形容されるのは、そこには、潜在的にはあっても、意志が含まれているからであって、私は潜在的な意志を顕在化させ、これを明示的に意志するという事も出来るのである。

われわれがものごとの間に見出す区別には、時間的な区別と意味上の区別とがある、と言えるであろう。このことは意志と行動の関係を考えるうえでも大切なことである。われわれはしばしば次のように考えるのではあるまいか。すなわち、私は決意し、これを行動によって私の世界のなかに実現しようとする、と。しかし、私の決意と行動とは時間的に継起するものとして、つまり決意と行動との区別は時間的なものとして一義的にのみ理解してはならない。それというのも、「決意と行動との区別は、時間的なものというよりは、意味上のものである」⁴⁾からである。

意志作用が何かを〈企投する〉。このことはあくまでも私の考え、私の意識における出来事であって、このことと、それを私の生きる世界において具体的に〈なす〉こととは別なことなのである。したがって、何かを〈企投する〉というだけの意志作用というものは、不完全な意志作用といわなければならない。〈行動する〉という試練にかけられてこそ、この意志作用が真正なものであるかどうかが明確になる。つまり、私の決意が真正なものであるとすれば、それは私の身体的運動を通して世界のなかの何ものかを変えるものでなければならない。この点において、私の真正な決意はたんなる願いとかが夢想といったものから区別されるのであって、「実現していない人は、まだ本当に意志してはいなかった」⁵⁾のである。

私が意志する何かは、私にとって実現されるべきもの、実現されるべき価値である。つまり、「価値は現実存在を要求している」⁶⁾のである。私が決意することによって、私は何かある価値をこの世界に招来しようとしている。私はこの価値を、自己の身体の運動を通してこの世界に実現しようとする。いいかえるならば、この価値は、私の身体的な運動によってこの世界に〈受肉〉されるのである。だから、私の意志作用にとって、行動するという事は本質的なことなのである。「行動の威厳は二次的なものではない」⁷⁾のだ。私の行動は、私の生きる世界のさまざまな試練に曝される。こうしたなかで私の意志の真正さがしだいに成熟していく。「意識が創意を発揮しつづけるのも、まさに何かをなすことによってである」⁸⁾のだ。

例をあげるならば、芸術家が作品を作り上げるという場合、彼は予め作品の観念をもっていて、これを作り上げるのではない。「芸術作品の完全な観念とは、完成された作品の意味のことなのだ」⁹⁾。いいかえるならば、「企投と作品とは、相互に産出し合うのだ」¹⁰⁾。

このように、決意するという事は身体的運動を通して、実現しようとするところのものの現実的受肉を企てることなのである。したがって、決意することと運動することとを区別することは、本来、不可能なのであって、もしこれを区別するとすれば、それは抽象によってのこととでしかない。「企投は行動を先取りし、行動は企投を試す」¹¹⁾のである。意志するとは、身体的な運動を通して自分の生きる世界を変えるということなのである。〈私が何もしない〉ということとは、「私はまだ何も意志してはいなかったということ」¹²⁾に他ならないのである。

こうした反省的考察は意志についてのあらゆる省察の中心的思想、すなわち「われわれの企投の成立は、心身合一の一契機にすぎない」¹³⁾という思想に導かれる。〈私は意志する〉ということが可能であるのは、私において心身が合一しているからに他ならない。私が何かを企投しているときには、すでに行動が現前している。このことは、〈できる〉という感覚(能力の感覚)

が企投の本質的な一契機をなしている、ということの意味している。それというのも、「決意するということは、私に依存し、私の能力の及ぶ未来の行動を空虚に目指すことにその本領がある」¹⁴⁾からである。いいかえるならば、「私が意志するものは、私になしうるものである」¹⁵⁾ということなのである。

2 〈意志すること〉と身体的能力

〈私はこれを意志する〉とは、〈これは私によってなされるべきである〉ということの意味する。そして〈なされるべきである〉ということは、〈私はこれを世界に受肉させることができる〉という感覚を私がつとということである。このことは、なされるべき行動に対する私の能力、私の力量を暗示している。すなわち、「私は、自分自身を行動の主体として企投することによって、自分にはこの行動が可能なのだ」と主張している」¹⁶⁾わけなのである。

いま見てきたことは、決意作用の本質を思い起こすならば、容易に理解されることであろう。そもそも、〈私は私を決定する〉(=私は決意する)とは、私自身を未来に向って企投することであり、しかもこの企投は「身体の服従を求めるような行為の主題」¹⁷⁾とされているものなのである。たしかに、私が決意するとき、私の能力、私の力量は明示されていない。しかし、私の企投の核心には自己帰責が見出されるのであり、その自己帰責のうちに私の能力、私の力量が潜在的に見出されるのである。したがって、企投によって開かれる可能性とは、身体的能力によって開かれているものなのである。私の身体的諸能力は私の企投を世界に受肉させようとしている。私の企投は私の身体的諸能力によって可能になるのであって、この企投は私を行動へ、現実の方向へ、世界の方向へと差し向けるのである。

こうした意志作用の記述は私が世界の中に存在していることを示している。私の意志作用のなかに私の能力、私の力量が潜在的に現前しているということは、私の企投そのものが世界の中に存在しているからに他ならない。ここにおいて、意志がたんなる空想とか想像から区別される。行動によって実現することの出来ないことは、私はこれを空想し、想像するのであって、意志するのではない。意志するとは、可能的なものを、私の能力、私の力量によって、この世界の中に現実化することなのである。

したがって、意志作用は、一方では、人間の心身の合一を示すとともに、他方では、人間が世界の中に受肉し、状況づけられていることを示している。意志作用が能力と結合しているからこそ、企投は世界を〈地〉にしたものとなっているのであり、そして、意志作用が空虚な企投であるとはいえ、世界のなかにおける思念となっているのである。「能力は、意志作用を想像的なものへと逸脱させずに、それを現実へと向けるのである」¹⁸⁾。そしてこの能力とは、私の身体的能力であることは言うまでもないことであろう。

3 〈私〉と〈私の身体的運動〉

このように、どのような意志作用であれ、意志作用には身体的な行動が伴っているのである。してみれば、われわれが意志するというのは、「自分の身体を所有している」¹⁹⁾ということの意味しているわけであろう。私が自分の身体を所有しているという場合、私と私の身体との関係には、いくつかの在り方が区別される。まず、意志作用が身体的運動を起こすということである。つぎに、現に行われている運動に結末をつけ、この運動を鎮めるということである。さらに、意志作用は、習慣の眠りのなかで微睡んでいる身体を目覚めさせるということである。

私はこうした自分の身体の運動を通して、自分の意志するところのものをこの世界の中に実現しようとする。その身体とは、無垢の身体ではなく、すでに私によって生きられてきた身体、

そして私によって現に生きられている身体なのである。つまり、「すでに情動によって突き動かされ、習慣によって整えられた身体」²⁰⁾なのである。私が意志するものを実現するためには、まずもって私の身体を動かすことが必要となってくる。私が自分の思うように私の身体を動かすためには、私は自分の身体を手はずけ、これを飼い馴らしていくことによって、自分の身体を所有するのではなくてはならないのである。

してみれば、意志作用の動機づけの働きには、意志作用のこうした機能が伴っているわけである。「意志的動機づけは、その身体の主人となる意志作用によって条件づけられている」²¹⁾。いいかえるなら、「身体は、意志作用が身体を所有している場合にだけ、意志作用を動機づける」²²⁾のである。われわれが自分の身体を自分で統御したり、導いたりすることが出来ないとするならば、われわれは決意するというのも、また自分が決意したことを実現しようと企てることも出来ないのである。

私は、私が決意したことを実現しようと企てる。この企てを可能にしているのは、差し当っては意志的運動であるが、意志的運動を最終的に可能にしているのは私の身体なのである。だが、それだけではない。私はさまざまに熟慮をかさね、決意するにいたるのであるから、「私の思惟作用の身体とも言うべき私の全思想」²³⁾もまた、私の行動を可能にしているものなのだ。私は意志を実現するために、私の身体を動かすが、同様に、私は私のあらゆる経験、私の知の総体をもまた、動かすのである。いうならば、「私は自分の知っていることを自分の身体として使っている」²⁴⁾という訳なのである。

〈私〉と〈私の知〉との関係、〈私〉と〈私の身体〉との関係、この二つの関係には共通性が存在する。すなわち、私の身体は私自身にとって一種の自然であり、私と私の身体との間には両義的な関係が存在する。同様に、私の思考は私自身にとって一種の自然なのであり、私と私の知との間には、「私と私の身体との間にあるのと同様の両義的な関係」²⁵⁾が存在するのである。

私が自分の意志を実現しようと努力するときに、私に抵抗を示してくるのは身体だけではない。私の知あるいは私の思考もまた、私に抵抗を示してくるのである。たしかに、「文字通りの意味で、思考の運動と思考するための努力とが存在している」²⁶⁾のである。「私が動機の価値的内容を表象するのは、私が身体の運動と観念の運動を統御している場合だけである」²⁷⁾。つまり、〈私が意志する〉ことを可能にしているのは、私がこの世界に在りながら、この世界から距離をとりつつ存在しているからであり、この世界にまだ実現されていない価値内容というものを私が表象することが出来るからなのである。そして私が表象する価値内容をおこの世界の中に実現しようと努力することが出来るのは、私が自分の身体の運動と観念の運動を統御しているからなのである。そしてこれが〈行動する〉ということの本来の意味なのである。

II 〈行動すること〉の志向性と〈運動すること〉

われわれは何ものかを目指して行動する。行動することは、何ものかを目指している。つまり、行動することの志向性というものが存在するのである。それでは、われわれは〈行動すること〉の志向性をどのように記述することができるのだろうか。ここで、リクールは差し当って、二つの困難を指摘する。第一は「行動することの現在」²⁸⁾であり、そして第二は「行動することの実践的志向性」²⁹⁾である。しかし、これらは、——すなわち、行動するということは現在の出来事であるということ、そして行動するということは具体的な実践によって目指すところ

のものに向っているということは——、行動することの特徴ともいうべき事柄なのである。してみれば、行動を特徴づけている事柄そのものが行動の記述を困難なものにしているということになる訳である。それにしても、〈行動すること〉の特徴とはどのようなものなのか、これを考察しておかなければならないであろう。

1 〈行動は現在の出来事である〉

行動を記述しようとする場合、われわれがまず最初に会う困難は、「行動の現在の[・]かつ[・]充[・]実[・]的[・]な[・]性[・]格[・]」³⁰⁾に由来するものである。すなわち、行動とは現に行われているもの、いま現在、行われている出来事である。しかも行動は何ものかを充実しようとしているのである。そしてこの行動を通して、私はこの世界のうちに新しく何かを創設しようとしているのである。

したがって、行動とは現に推移しつつある現実そのものの一面なのである。リクールはこのことを、「前進する持続の肉」³¹⁾と表現している。行動は持続せるものであり、行動の時間的指標は、現在、しかも「絶えず更新されてゆく現在」³²⁾なのである。私の行動は、いま現在において行われている。そして行動によって招来されたものは現在において存在している。私がそこにおいて行動する世界は、拒みがたく、現に私の前に現前している。私の行動を可能にしている世界が私にとってこのような世界として現前しているということ、このことは、私の一切の思惟を超えている。しかし、この私は行動の主体、つまりさまざまな出来事の作者なのである。

われわれが現象学的方法によって行動を記述しようとするとき、記述することが出来るのは、行動という作用と行動の志向的相関者との関係であって、現になされている行動を記述することはできない。われわれが行動について語りうるのは、「行動と行動が即座にあるいは遅ればせに充実する空虚な志向との関係」³³⁾なのである。

私は何かを実現しようとして行動を行う。行動は、意志が空虚に志向しているものを充実しようとする。私が何かを実現しようとしているということは、「企投の可能性から行動の現実性への移行」³⁴⁾を意味する。したがって、「実現 (réalisation)」³⁵⁾は「充実 (remplissements)」³⁶⁾というカテゴリーの中に含まれるものなのである。

だが、この充実という関係については、われわれは二つの面を区別しなければならない。充実という関係においては、まず第一に、企投や命令、欲望、恐れなどを〈充実する〉現前あるいは行動、というものの意味は、企投の意味と同じものである、ということである。ある企投の〈空虚な意味〉と〈充実した意味〉の間には、合致あるいは重なり合いが見出される。だから、私が意志しているもの、私が企投しているものは、それである、とか、それではない、と言うことが出来るのである。

充実という関係においては、第二には、この合致ということ、〈空虚な意味〉と〈充実した意味〉との間における合致であるということ、である。私が何かを考える。私の考えは何かについての〈空虚な志向〉である。その何かが直観によって充実されるとき、この直観は私の考えを越え出ている。同様に、「行動することもまた思考作用を越え出る」³⁷⁾のである。したがって、行動するということは、純粹な思考に相応しているというよりも、むしろ〈楽しむ〉〈苦しむ〉〈見る〉といった作用に相応していると言うべきであろう。

しかしながら、〈企投の実現〉と〈直観による志向の充実〉とは区別されなければならない。その区別は次の点において行われなければならない。すなわち、行動においては、その実現されるものの作者はこの私自身であるということ、現実を私の思考と結びつけるものは身体的作用であるということ、これである³⁸⁾。

次に問題となってくるのは、行動によって行われるこの実現というものは、記述され得るものなのかどうか、ということである。さらにそれが記述され得るとすれば、それはどのようにしてなのか、ということである。

2 行動することの実践的志向性

それでは、〈行動すること〉を、どのように記述するのか。この問題に関連して、第二の困難が生ずる。まず、行動についての言述は存在しない、と想定してみよう。そうすると、企投はその実現を行動によって目指すのであるから、実現についての言述だけが存在するということになるであろう。それでは、実現についての記述をどのようにして行うことが出来るのであろうか。企投の目指すところの実現ということは、「その実践的性格」³⁹⁾ からして、これをうまく把握することは困難なのである。

私は思考作用によって何かを企投すると決意し、行動を起こす。それでは、行動することは思考作用のひとつだと言えるのであろうか。デカルトは思考作用を例示して、〈私は欲する〉〈私は意志する〉〈私は知覚する〉〈私は感覚する〉といった作用を挙げてているが、それらとともに、〈私は行動する〉もまた、思考作用のひとつである、と言えるのだろうか。

たしかに、〈私は欲する〉〈私は意志する〉〈私は知覚する〉〈私は感覚する〉といった作用について志向性を語るができる。しかし、これと同様に、〈行動する〉ということの志向性というものを語るができるのであろうか。これが問題なのである。そして、これは深刻な問題である、というべきであろう。それというのも、リクールは「現象学的心理学を志向性の王国そのものと同一視する」⁴⁰⁾ からである。

してみれば、〈行動する〉ということは意識の志向性の王国をはみ出している、と言うべきではないのか。あるいは、〈行動する〉ということは、広義の〈考える〉という働き、つまりコーゴト全体に対立していると言うべきではないのだろうか。行動するとは〈産出的な力〉であるのに対して、思考作用は〈非一産出的思念〉である、と言うべきではないのだろうか。

しかし、リクールは〈行動すること〉を記述していくために、「志向性の概念と思考の概念そのものを拡大する」⁴¹⁾ のである。彼はすでに第1部「決意すること」において、志向的心理学のなかに感受的感情(快や苦痛など)とともに能動的的感情(欲求や準一欲求)という概念を導入している。こうした考え方の延長線上に〈行動すること〉を捉えて、〈行動すること〉も拡張された意味における志向的思考作用のひとつである、とリクールは理解するのである。なぜなら、リクールによれば、「身体的実存をも包み込む全体としての思考は、単なる光ではなく、力でもある」⁴²⁾ からである。この点において、リクールは、デカルトとは異なっている。というのは、デカルトは、思考作用を、身体的実体からまったく独立した作用と捉えているからである。

行動は世界のうちにさまざまな出来事を産み出すが、このような行動の能力、つまり「世界のうちにさまざまな出来事を産み出す能力は、さまざまな物と世界とに対する一種の志向的關係なのだ」⁴³⁾ というわけである。

〈なす〉(faire)という動詞の他動的構造や動作動詞の他動的構造は、表象作用を表わす動詞の他動的構造と類似関係をもっている。そしてわれわれの動作を表わす動作動詞は、われわれという主観から動作が向かう対象への方向を表わしている。われわれ、あるいは私という主語の行動あるいは作用(action)が向かうところのもの、それが対象(objet)なのである。

ところで、この行動あるいは作用という用語は、第一には、主語としての人間が自分の身体を通して行う事柄を意味しているが、第二には、或る物的対象が別の物的対象に対して行う動

きをも意味する。このように、〈作用〉(action)という語は、二重の意味をもっている。この二重の意味を統一的に理解しようとするならば、動作の主体としての人間を、さまざまな対象のなかの一つの対象として捉えるとよいのである。このように考えるならば、「経験的因果性が、身体的運動の客観的指針となる」⁴⁴⁾のである。

このように、われわれの意志的行動というものは、われわれ自身の身体を通して行われるものなのである。リクールはすでに自分の身体と対象としての身体との間に「診断的關係」⁴⁵⁾を認定しているのだから、「意志的運動と因果の客観的諸關係との間には、或る種の対応關係が打ち立てられている」⁴⁶⁾ということになる。したがって、この対応關係が〈作用〉(action)という語の意味の二重性を正当化するわけなのである。

そしてこのことから、「主観性の王国と対象性の王国」⁴⁷⁾が、「観念と運動との連続的体験的な結びつきと、原因と結果との外的關係」⁴⁸⁾が、あるいは心理学の領域と物理学の領域が、混乱してくることになるのである。

しかしながら、もしもわれわれが自分の身体を、対象性の世界ではなく、主観性の世界に含めて、これだけを捉えるならば、意志的行動の他動性は、物理的因果性と混合したりすることなく、純粹な姿で現われてくるはずなのである。これが、「主観性が世界に対してもつ根源的關係」⁴⁹⁾なのである。こうして、意識の根本的特徴としての志向性の概念が拡張されるのである。

この根本的な關係からすれば、行動するとは、「主体がさまざまな対象に関わる或る種の仕方」⁵⁰⁾に他ならない。行動するとは、主体が行動を通して最終的に実現しようとしていることを目指しているということである。してみれば、考えることと考えの対象との間に志向的關係が見出されるのと同様に、行動することと行動の最終項の間にも、一種の志向的關係が見出される訳なのである。そして行動することについて言われる志向的關係を、「実践的志向性」⁵¹⁾と呼ぶことができるであろう。この実践的志向性は、どのような表象の志向性からも、また、決意することから企投へと向かう実践的表象の志向性からも、はっきり区別されるものなのである。したがって、実践的志向性は、「理論的志向を充実させる直観の対称点、企投を充実させる行動」⁵²⁾そのものなのである。

リクールは意識の根本的特徴としての志向性という概念を拡張し、実践的志向性の概念を提示する。このことによって、〈行動する〉ということの現象学的記述が可能となる。私が何かを意志する。その意志作用は、たしかに、コーギトのひとつといえる。リクールは、『意志的なものと非意志的なもの』第1部「決意すること」のなかで、意志作用をあくまでも意識のひとつの作用として捉え、これの解明に努めている。しかし、意志作用は力でもあるのだ。私は、自分が意志するものを身体的行動を通してこの世界のなかに実現しようとする。つまり、意志作用は力という概念と切り離して理解することはできない。〈行動する〉とは、「コーギトの独自の一次元、フッサールの言う意味での『……についての意識』の一つ」⁵³⁾なのである。こうして、意志の力の主観的性格は実践的志向性によって理解可能なものとなるわけなのである。

3 〈プラーグマ〉、あるいは行動することの志向的相關者

直観の志向性において、志向作用と志向的对象とが相關關係をもっている。たとえば表象作用についていうならば、これは、何かを表象するという作用とこの作用によって目指されている対象との相關的關係である。これと同様のことが、実践的志向性の概念を導入することによって、〈行動する〉ということについて語ることが出来るようになったのである。

もっとも、ここで注意しておくべきことは、運動と行動とは区別されるものであって、われ

われが実践的志向性によって捉えようとしているのは、〈行動すること〉であって、〈運動すること〉ではないということである。私が自分の意志したものをこの世界において実現しようとするとき、私は何かこれこれの運動を行うのではなく、しかじかの行動を行うのである。たとえば、〈私は壁に絵を掛けている〉のである。私のこうした行動を、私の身体を私の外部から観察している人は、私の身体的な諸行動を分析して、私の〈運動〉を語るなのである。このように、「行動とは、一つの全体的意味をもつ一つの総体的形態であり、それはさまざまな運動を通して、つまり異なったさまざまな最初の姿勢から出発しながら、いろいろな要素的諸運動の可変的布置を通して獲得される総体的形態なのである」⁶⁴⁾。

主観性の現象学の立場に立つのではなく、私の身体的動作を対象化して捉える人は、身体的な運動について語る。それが、主観性の現象学と対蹠的な立場に立つ人たちの、たとえば、トールマンのような行動主義者たちの力説する客観的・科学的心理学なのである。しかしながら、「運動形態もまだ、行動の真の対象ではない」⁶⁵⁾。行動は身体を通して行われる。つまり、「行動が身体を〈貫く〉」⁶⁶⁾のである。

私が関心をもつものは、自分の身体ではなく、むしろ私の行動が生み出すものである。〈知覚する〉について〈知覚されているということ〉が、〈為す〉(faire)について〈為されていること〉(factum)、〈為された事実〉(fait)、〈私によって為されつつあること〉が語られる。そしてこれが、プラグマ(pragma)なのである。

このプラグマというものは、これを問いと答えという関係から捉えるならば、「あなたは何をしていますのですか」という問いに対する答えである。この問いに対して、「私は壁に絵を掛けているところです」と私が答える。この場合、「私が壁に絵を掛けているということ」、これが完全なプラグマである。したがって、プラグマとは、文法的な用語を用いていえば、目的補語ということになる。つまりプラグマとは、「なすことの補完的相関者」⁶⁷⁾なのである。

プラグマとは、問いに対する答えとしての行動、「補語—行動」⁶⁸⁾である。プラグマには、「行動の完全な構造を構成する多くの関係」⁶⁹⁾が包含されている。この記述の主要な諸要素は、どのような立場の心理学にも見出されるが、リクールが着目するのはレヴィンやコフカ、トールマンである。レヴィンやコフカはゲシュタルト心理学に属しており、またトールマンがゲシュタルト心理学の影響を受けていることはよく知られているところであろう。

われわれはプラグマの内的文節をトールマンの使用する概念で分析することができる。それらの概念は目的論的な概念である。このことは、「世界は、〈手段—目的関係の場〉(means-end field)なのだ」⁶⁰⁾ということの意味する。私の行動が行なわれる〈地〉としての世界が私に現われてくるのは、「知覚された諸性質や諸形態を通して」⁶¹⁾のことである。私が行動するにあたってさまざまな手段や通り道を弁別するのに役立つくれる限りでの指標、われわれはこれをディスクリミナンダ(discriminanda)と呼ぶことができる⁶²⁾。トールマンが使用する他の二つの概念はマニブランダ(manipulanda)とユティリタンダ(utilitanda)という概念である。

マニブランダとユティリタンダという概念は、ある共通性と差異性をもっている。両者の共通性とは、これはいずれも、〈目的—対象〉(goal-object)に対する〈手段—対象〉(means-object)である。しかし、この二つの概念には次のような差異性が存在する。

まず、マニブラドゥムとは、「目的とは無関係に考察された対象のもつ操作可能な、そして実行可能な機能」⁶³⁾を意味する。たとえば、棒は、われわれが掴まることができるものであり、道は、われわれが辿ることができるものである。

これに対して、ユティリタンドゥムとは、〈……に至る〉という、マニプランダのもつ特性を意味する。したがって、これは手段の目的に対する関係のことである。たとえば、われわれが辿ることのできる道が、食物に通じるというような関係である。

トールマンは、弁別・操作・有用性といった目的論的關係が曖昧で両義的であることを強調している。これは当然のことであって、それというのも、われわれの行動の世界とは「実践的蓋然性の世界」⁶⁴⁾だからである。行動の世界が蓋然性の世界だからこそ、われわれの期待が、予期に反して、しばしば裏切られるのであり、何かを実現するためには、さまざまな仮設をたて、ときには大胆な試みを実行しなければならないのである。

このようにトールマンの記述においては、「行動の場の目的論的局面」⁶⁵⁾が強調されるのに対して、ゲシュタルト心理学のコフカやレヴィンは、むしろ「ダイナミックな局面」⁶⁶⁾を強調する。たとえば、私がゆったりと浜辺に寝そべっているとき、その場は平衡を保っている。しかし、「助けて！」という叫び声が聞こえてくると、その場は、たちまち、叫び声の方へと引き伸ばされた「訴えの円錐形」⁶⁷⁾に変わるのだ。われわれの行動はさまざまな障害や壁などによって阻まれるのであって、だからわれわれが行動することによって目的を実現していくためには、目的に至るさまざまな道の「通行可能度 (praticabilité)」⁶⁸⁾を問い質していかなければならないのである。

私が何らかの目的を実現しようとする場合、私の行動の場は文明の場であり、この場は複雑である。というのは、この行動の場はさまざまな人間の行動の所産によって満ち溢れているからである。したがって人間は己れの所産、己れの作品に働きかけていることになる。このように、人間の場と人間の行動は優れて技術的な性格をもっている。この技術的性格は、「人間が道具を用いて労働し、自分の文明的な欲求やさらには生命的な欲求の〈人工的〉対象を生産するという事実」⁶⁹⁾に由来する。この意味において、人間の行動は典型的に〈人工的〉であると言われるのである。それというのも、人間の行動は、「〈テクネー〉 (techné)、つまり、さまざまな芸術や技術の母」⁷⁰⁾ともいうべきものだからである。

このように見てくれば、〈行動する〉とは、意志作用の主体としての〈私〉が、行動の領野としての世界のなかで、企投によって目指していることを実現しようとして、身体的な運動を行うことである、と言ってよいであろう。行動は世界において行われる。その世界は、私によって何かがなされるべきものを包含している。私の生きる世界は、その何かが企てられなければならない世界として、私にとって存在している。「私は、なされるべき何かが存在するような世界のうちにいる」⁷¹⁾。こうした私の世界把握の仕方は、私の世界解釈に基づいている。われわれが世界を変革しようとするならば、なによりもまず、世界についての解釈を行っているのだからなければならないのである。

私は、具体的な状況において、何かを企てる。「状況は、或る意識態度と或る身体活動と呼び求める」⁷²⁾。世界には何らかの問題、あるいは課題が存在する。世界は私の企投を、行動を求めている。世界には未解決の問題、果されるべき課題が存在する。そして私は、世界のなかで、これこれの問題を解決することができる、しかしかの課題を果たすことができる、と感じている。この能力の感覚、〈私はできる〉という感覚が私のなかに見出される。そのとき、世界は、「私の行動の地平・舞台・素材」⁷³⁾として、私に開示されるのである。

4 〈行動すること〉の器官としての〈運動すること〉

私の行動は私の身体を通して行われる。行動の領野とは世界であり、行動は世界のひとつの

局面である。そうとすれば、私の身体は、私が行動することにおいて、どのような意味をもっているのであろうか。

まず、われわれがはっきりと理解しなければならないのは、「身体は行動することの対象ではなく、その〔行動の〕器官なのだ」⁷⁴⁾ということである。だからリクールは、「行動が身体を〈貫く〉」⁷⁵⁾という表現を行うのである。これは、身体は行動の道具であるという考えを拒否することを意味する。なぜなら、器官を延長したものが道具であって、道具は身体の外部に存在するものだからである。

たいていの場合、われわれは道具を用いて行動する。そこには〈身体器官プラス道具〉の関係が存在する。してみれば、〈器官—プラグマ〉という行動の関係は、〈器官—道具—プラグマ〉という関係になる。これは、道具によって拡張された身体器官とプラグマという関係になるであろう。私が何か道具を手にして行動するとすれば、私の行動は、私の身体と私が手にする道具というひとつの有機的な媒介者となっているのであって、そうして道具によって拡張された私の〈身体器官〉を貫いているのである⁷⁶⁾。

ところで、ひとは道具を手にして何かを製作する。この〈道具—製作物〉という関係は世界のなかに存在するのであり、この関係とは物理的なものなのである。物理的な現象は〈原因—結果〉の関係において捉えられるが、〈道具—製作物〉の関係は、因果関係を〈手段—目的〉の関係に変えたものと言うことができる。技術的關係においては、有機的な概念は排除され、客観的な解釈が行われる。こうしたわけで、「道具—製作物という関係の物理的で工業的な性格が、人間—道具という関係の有機性格を食い尽くしてしまう」⁷⁷⁾ということになる。

この点において、〈意志—器官—道具—製作物〉という系列は両義的である、と言わなければならない。両義的というのは、この系列は初めの項である〈意志〉から出発して辿ることもできるし、また終わりの項である〈製作物〉から出発して辿ることもできるからである。このことは、つまり、この系列は、現象学の視点から辿ることも、また物理学の視点から辿ることもできるということなのである。こうした二つの読解の交差点をなしているもの、それが道具なのである。したがって、道具が器官の機能を解明してくれる、などと考えることはできないのである。

しかも、私は、自分の身体器官を道具として扱うことはできない。というのは、身体器官を延長したものが道具だからである。もし私が何らかのことを実現しようとして行動するとすれば、私は自分の身体器官を意志作用の道具と見做していることになる。しかし、そのとき、私は意志作用そのものを身体器官として捉えていることになるのである。身体器官を道具と見做すことから、〈主体—意志作用〉と〈対象—身体〉の二元論が生じてくるのである。

ここで〈行動する〉ことから区別される〈運動する〉ことの意味を考えておくことにしよう。行動は行動の対象を目指す。この場合、行動の対象がプラグマと呼ばれる。そして行動の器官が運動形態に他ならない。してみれば、〈行動する〉と〈運動する〉との間には、或る密接な関係が見出される。すなわち、「運動するとは、プラグマ、つまり事物と世界に終わる限りでの行動することではなく、器官に向けられる限りでの行動することなのである」⁷⁸⁾。

つまり、行動するとは、身体器官の運動を通して何かをこの世界において実現していこうとすることである。これに対して、運動するということは、身体器官に注意を向けて、身体器官の運動形態そのものの形成が目的となっている。したがって、運動するとは、「最も広い意味での体操」⁷⁹⁾を行うことである。それは、われわれの現実の生活において実際に必要とされるよ

うな身体器官の動作ではないのだ。

しかし、そうはいても、〈行動する〉と〈運動する〉とは、決して無関係なのではない。私の世界における行動は、さまざまな障害や抵抗に出会う。そのとき、私は「身体の不如意さ」⁸⁰⁾を思い知ることになる。そしてこの不如意さは、〈私が意志するものをこの世界において実現していくために、身体器官がその媒介機能を果たしていること〉を告知している。私はこうした〈身体の不如意さ〉を乗り越えようとする。この企てが「努力」⁸¹⁾と呼ばれる。すなわち、「努力とは、抵抗の意識によって複雑化された運動することそれ自身なのである」⁸²⁾。

たしかに、努力という現象は、意志作用と身体器官との対立を示すであろう。しかし、だからといって、このことが、意識と身体との二元論を保証することにはならない。意志作用と身体器官との間に、対立だけを見てはならない。なぜなら、「運動することの本質は、身体が意志作用に譲歩するところにある」⁸³⁾のだからである。身体器官の意志作用に対する抵抗という現象は、意志作用に対する身体の従順さという現象があって、はじめて理解されるのである。その意味では、抵抗という現象は、「意志作用に応える身体の従順さそのものの複雑化した一形態」⁸⁴⁾として理解されなければならないわけなのである。

ときには抵抗を示すとはいえ、身体は意志作用に応える。その意志作用は力、能力、力量と一体をなしている。力、能力、力量とは、何かを為し得るということ、したがって、潜在的なもの、潜勢的なものである。それが現勢的、現実的なものとなったものが運動とか行為というものなのである。すなわち、「能力とは、行為の手前に留めおかれた運動することそれ自身、潜勢における運動である」⁸⁵⁾。

〈私はこれから泳ぎに行く〉。〈私はこれからダンスを踊る〉。このように、私は私にとって、〈さまざまな企投の複合体〉として現われる。また、〈私は、泳ぐことができる〉。〈私はダンスを踊ることができる〉。このように、私は〈さまざまな能力の複合体〉として私にとって現われてくる。つまり、私は私にとって、〈諸々の企投の複合体〉として、〈諸々の能力の複合体〉として現われるのである。「能力は、行動の残滓であると同時に、行動の約束でもある」⁸⁶⁾。

能力とは、〈私は……することができる (pouvoir-faire)〉ということである。このことをフランス語では、〈私は……することを知っている (savoir-faire)〉と表現する。この〈savoir-faire〉という語を〈ノウハウ〉と訳すことにしよう。これは〈できる〉という意味である。英語やドイツ語では〈私は泳ぐことができる〉というが、フランス語では〈私は泳ぎを知っている〉という言い方をするのである。本当に〈知っている (savoir)〉と言えるのは、「反省された人間の能力、つまり意識を経由した人間の能力」⁸⁷⁾だけであるに違いない。その意味において、ノウハウとは〈反省された一できる〉であるということになる。

以上、行動における身体についての反省的考察を行ってきた。それは「〈意志作用の器官に対する反省〉」⁸⁸⁾であって、これは、学習によって、身体は無償の訓練によって、私の力の自覚によって、促進されるものである。しかし、この反省は大抵は、多少とも「非反省的な仕方」で身体を貫き、事物そのもののなかで終局に達する行動の変様」⁸⁹⁾なのである。

私は自己の身体を通して企投を実現しようとする。すなわち、私は運動するのであり、私は行動するのである。この場合、私の身体とは、「〈私一によって一動かされた私の身体〉」⁹⁰⁾である。〈私は私の身体を動かす〉。ここにおける〈動かす〉という意識においてコーギトが意味するのは「意志的受肉」⁹¹⁾であって、これは「能動的な受肉、つまり私の身体、身体としての私に対して行使される支配」⁹²⁾に他ならない。

もっとも、そうはいつでも、多くの理由から、身体の意志的な運動についての反省がほとんど不可能になっている。というのは、行動そのものが、さらには運動そのものが、われわれの反省から逃れ出ていってしまうからである。たしかに、反省は、企投の思念というものを、企投する意識の相関者として捉えることであろう。しかし、意志作用がプログラマのなかにもどのように展開しているのか、また、私の意志作用が私の身体の内なかでどのように展開しているのか、ということを知ること、きわめて困難なことである、と言わなければならない。なぜなら、「私は、自分の身体が動かされているなどとは思わないほど、自分のなすことに巻き込まれている」⁹³⁾ からである。

私が行動しているとき、たしかに私は自分の身体を動かしてはいるが、しかし自分が行動しているという意識も、自分を動かしているという意識も、副次的、欄外的な意識のレベルに止まっているのである。行動しているとき、私が明瞭に意識しているのは、行動の目的、知覚対象、一般的に言って、行動を規制している表象対象なのである。「行動しているという意識は、その大部分が決意の継続、企投の持続・修正・更新である」⁹⁴⁾。〈私は私を動かしている〉という反省的、再帰的な意識は、一種の暈のような仕方、主軸的な志向、主軸的な意識に付着しているのである。

決意とは、〈私は私を決定する〉(＝私は決意する)ということであるが、この表現の内なか、決意の根本的に再帰的な性格が示されている。その再帰的な性格のゆえに、決意作用はつねに反省へと、反省的考察へと準備されている意識であるが、これに対して、意志的運動はこの反省から逃れているのである。「私は自分を動かす(私は動く)」という対応する言表の内なか、表現されている意識は、〈私はしかじかの行動を行っている〉という行動の意識によって「貫かれ」ており、この行動することの意識も、それはそれで、その非表象的性格の故に容易には反省されないのである」⁹⁵⁾。

こうしたわけで、「器官的に行動することに専念している意識の働きをとり押さえる」⁹⁶⁾ ということは、きわめて困難なことである、ということになるのである。

注

- 1) Paul Ricœur, *Le volontaire et l'involontaire*, Aubier Éditions Montaigne, Paris, 1967, p. 187. ポール・リクール『意志的なものと非意志的なもの・II』(滝浦静雄・竹内修身・中村文郎訳)、紀伊國屋書店、1995年、348頁。
- 2) Id., *ibid.* 同前。
- 3) *Ibid.* 同前。
- 4) *Ibid.* 同前。
- 5) *Ibid.* 同前、349頁。
- 6) *Ibid.* 同前。
- 7) *Ibid.*, p. 188. 同前。
- 8) *Ibid.* 同前。
- 9) *Ibid.* 同前、350頁。
- 10) *Ibid.* 同前。
- 11) *Ibid.* 同前。
- 12) *Ibid.* 同前。

- | | |
|----------------------------|----------------|
| 13) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 14) <i>Ibid.</i> | 同前, 351 頁。 |
| 15) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 16) <i>Ibid.</i> , p. 189. | 同前。 |
| 17) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 18) <i>Ibid.</i> | 同前, 351-352 頁。 |
| 19) <i>Ibid.</i> | 同前, 352 頁。 |
| 20) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 21) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 22) <i>Ibid.</i> | 同前, 353 頁。 |
| 23) <i>Ibid.</i> , p. 190. | 同前。 |
| 24) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 25) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 26) <i>Ibid.</i> | 同前, 354 頁。 |
| 27) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 28) <i>Ibid.</i> , p. 191. | 同前, 355 頁。 |
| 29) <i>Ibid.</i> , p. 192. | 同前。 |
| 30) <i>Ibid.</i> , p. 191. | 同前。 |
| 31) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 32) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 33) <i>Ibid.</i> | 同前, 356 頁。 |
| 34) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 35) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 36) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 37) <i>Ibid.</i> , p. 192. | 同前, 357 頁。 |
| 38) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 39) <i>Ibid.</i> | 同前, 358 頁。 |
| 40) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 41) <i>Ibid.</i> , p. 193. | 同前, 359 頁。 |
| 42) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 43) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 44) <i>Ibid.</i> | 同前, 360 頁。 |
| 45) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 46) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 47) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 48) <i>Ibid.</i> , p. 194. | 同前。 |
| 49) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 50) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 51) <i>Ibid.</i> | 同前, 361 頁。 |
| 52) <i>Ibid.</i> | 同前。 |
| 53) <i>Ibid.</i> | 同前, 362 頁。 |
| 54) <i>Ibid.</i> , p. 195. | 同前, 363 頁。 |

- 55) *Ibid.* 同前。
56) *Ibid.* 同前。
57) *Ibid.*, p. 196. 同前, 364 頁。
58) *Ibid.* 同前。
59) *Ibid.* 同前。
60) *Ibid.* 同前, 365 頁。
61) *Ibid.* 同前。
62) *Ibid.* 同前。
63) *Ibid.*, p. 197. 同前, 366 頁。
64) *Ibid.* 同前。
65) *Ibid.* 同前。
66) *Ibid.* 同前。
67) *Ibid.* 同前。
68) *Ibid.* 同前。
69) *Ibid.* 同前, 367 頁。
70) *Ibid.* 同前。
71) *Ibid.* 同前。
72) *Ibid.*, p. 198. 同前。
73) *Ibid.* 同前, 368 頁。
74) *Ibid.* 同前。
75) *Ibid.*, pp. 195 et 198. 同前, 363 頁及び 368 頁。
76) *Ibid.*, p. 199. 同前, 369 頁。
77) *Ibid.* 同前, 369-370 頁。
78) *Ibid.* 同前, 370-371 頁。
79) *Ibid.*, p. 200. 同前, 371 頁。
80) *Ibid.* 同前。
81) *Ibid.* 同前。
82) *Ibid.* 同前。
83) *Ibid.* 同前, 372 頁。
84) *Ibid.* 同前。
85) *Ibid.* 同前。
86) *Ibid.* 同前。
87) *Ibid.*, p. 201. 同前, 373 頁。
88) *Ibid.* 同前。
89) *Ibid.* 同前。
90) *Ibid.* 同前。
91) *Ibid.* 同前。
92) *Ibid.* 同前。
93) *Ibid.* 同前, 374 頁。
94) *Ibid.* 同前。
95) *Ibid.*, p. 202. 同前。
96) *Ibid.* 同前。